

随想

予想以上の高病原性A1発生現状

慣れてはいけない!!

株PPQC研究所 加藤 宏光

十一月二十八日の夜、青森のアヒル農場と新潟の採卵農場でH5N6亜型の高病原性鶏インフルエンザ(HPAI)発生の情報が入った。約一万六、五〇〇羽のアヒルと新潟県下地域域の三〇万羽の採卵農場である。その翌日には同じく新潟県上越市でも二、三万羽の採卵農場でHPAI発生が報じられた(正式な情報は二十九日であったが、その時点で業界ではかなり具体的なニュースが飛び交っていたようである)。

二〇〇四年、七九年ぶりに発生したH5N1亜型HPAIは韓国で二〇〇三年の十一月頃に発生し、年を超えての日本での発生であり、その後の発生も一月〜三月頃に集中していたた

め、漠然と『わが国での発生は年初くらいから……』等と刷り込まれていた。十一月末での発生が現実のものとなったとき、多少ならず驚いた。

今年のHPAIウイルス分離情報は十一月十五日に秋田市大森山動物園でコハクチョウ一羽が死亡、AI簡易検査で陽性となり、その後H5N6亜型であることが確認された。続いて十八日には鹿児島県出水市のナベヅルで同じウイルスが分離された。また、二十一日には鳥取県でコガモの糞から同じくH5N6亜型ウイルスが分離される等、野鳥からのウイルス確認情報が続出した。

これに先立って、問題となった韓国では、十月末に大学の研

究チームがH5N6亜型ウイルスの確認をしたが、防疫当局が稼働したのは十一月十一日、農林畜産食品部長官の率いる家畜防疫審議会が動き始めたのは十六日で、大学チームの警報から三週間が経過していた。家禽で疑わしい事例が報告されてから非常システムが作動するにも三日かかっていた。

日本での対応はきわめて迅速で、最初の青森の事例では確認翌日には一万六、五〇〇羽のアヒルが殺処分、埋却され、秋田の三〇万羽の事例でも十二月二日には殺処分終了の予定と報道された(この原稿は十二月二日に記述)。簡易検査陽性時点で、半径三〜一〇キロ圏内での搬出制限区域を設定している(もつ

範であろう」と推察した。この想定が正しいとして、著者は、『昨シーズンについていえば、わが国でのH5亜型ウイルスによるHPAIの発生はないであろう』

①もし、H5N2亜型を中心とするHPAIウイルスが想像どおりに野生の水禽に満遍なく感染していれば、運悪く死亡する個体を別として、生き残ったモノは自然にワクチネーションされたようなものであり、感染耐過した成鳥の大多数はウイルスを持たず、かつ強いH5亜型ウイルスへの抗体を有するはずである

②この成長から生まれた次世代はやはり高い移行抗体を保有する

③一方、自然界でのウイルス浸潤レベルは相対的に下がる(タイプ異なるウイルスは抑えられないが……)

④よって、昨シーズンについては、わが国へ飛来する水禽のH5亜型ウイルス汚染レベル

はその前のフェーズに比較して格段に低い!

⑤この結果、ウイルスが養鶏場へ持ち込まれる機会は相当度低いのではないか……??

希望的観測ではあるが、このような想定で、HPAIの発生リスクは低いことを推論した。しかし今期については『わからない』とした。

前に述べた事象の持続性が想定できないためである。そうはいいながらも、動物園等で飼育されるカモやハクチョウ等の寿命が五〜六年はあることから、今期もある程度はカバーされるのではないかと期待していた。『もし成長の寿命が五〜六年もあれば、AIにフリーな新世代比率は一〇〜一五%くらいではないだろうか』

①今年の野鳥の汚染レベルは極

めて以上に高く、日本全域を同時に汚染している可能性が高いこと

②渡り鳥からAIウイルスをもらった留鳥(スズメやハト等)だけがリスクファクターでなく、タヌキ、キツネ、テン、イタチやネズミ、ネコを含む四足動物をウイルスキャリアとして注目(山口先生は、農場内へ意外な通路を通って、タヌキやテン、ハクビシン等が侵入している現実を、センサー付きの監視ビデオカメラで捕捉している)

③カモ等の世代交代は想像より早い(山口先生は、誰から聞いたかわからないが、という条件ながら、一年で半分は世代交代している可能性を示唆)という事情を聴いた。この現実と、宮城県登米市のコガモからのHPAIウイルス確認とを照らし合わせると、背筋が寒くなる想定が浮かび上がる。登米市のコガモは、一般家庭の庭で死亡していた野生のカモを家畜保健所が確保、検査の結

果陽性と診断したものである。一般家庭の庭に死亡したカモが落ちていたことから、HPAIに感染して運悪く死亡するカモやハクチョウがどのような《死に方をするか》について獣師の意見を聞いたところ『群れに付いて飛んでいて、力尽きたところで落ちるのだろう』という。

昨日北関東の農場への道に、死亡したハトかツグミあるいはウズラ大の野鳥が落ちていた。車にひかれていた。もし、この鳥がHPAIで死亡していて、それをひいた車が養鶏場関連のものであれば……。この鳥を食べたカラスやネコ、あるいはタヌキがウイルスキャリアとなつて、農場へ侵入したら……。考

えると恐ろしい!!

気を付けることはさまざまにあるが、想定条件をくぐって新しい事象が表れているのが現実である。

わが業界に関連する皆様、是非とも心を引き締めてください。折角の三年続きの高卵価があだ花にならないように……。